

『おじ様と私ー川端康成回想記ー』

阪本昭子 PHP 2017.12

康成を「おじ様」と呼び親しく接した著者がその思い出を感じたままに書き綴った37篇のエピソード集。第3者視点の伝記からはなかなか見えない優しい心配りが透けて見えるようです。大阪で育った康成は筆者の作る関西の味を殊の外よろこんでいたようで、食にまつわる話題が多いのがほんわかします。

『川端康成初恋小説集』

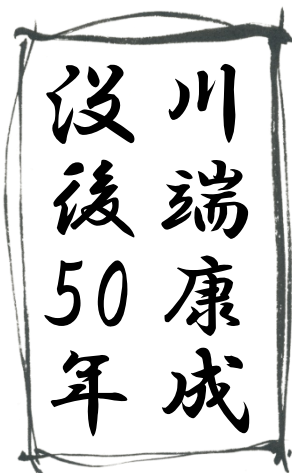
川端康成 新潮社 2016.4

伊藤初代との悲恋を題材にした、一連のいわゆる「ちよもの」を集成した短編集です。同じ出来事から人名や場面を少しずつ変えながら何度も、特に「南方の火」は同タイトルで4篇が著されるなど、後の川端文学への大きな影響がうかがえます。本書は「ちよもの」21篇を収録しますが、これでも納めきれない23篇が巻末の一覧で紹介されています。

『巨匠の眼ー川端康成と東山魁夷ー』

川端香男里 東山すみ 水原園博 他
求龍堂 2014.4

東山魁夷と康成は互いの作品に挿絵や序文を寄せあうなど、深い親交を結んでいました。本書は同名の展覧会を機に刊行されたもので、近年発見された多数の往復書簡を加え、古美術の名品から魁夷自身の作品まで多岐にわたる双方のコレクションで、巨匠の糧となった美術をかたちとことばの両面からひもときます。



第6回

書名でしりとり

書名の最後の1字で次の本へ
つなげていく企画
第6回の文字は前回の書名から
「り」です。

『理系研究者の「実験メシ」』 (松尾佑一/著 光文社 2021..5)

太陽光でお米は炊ける？ インスタントラーメンが美味しく食べられる限界点は？ など食にまつわるふとした疑問を、理系研究者である著者が自ら実験して確かめる、大人の自由研究レポート。
食欲と知識欲を同時に満たすことができる、まさに一石二鳥の「おいしい」本です。

『川端康成詳細年譜』

小谷野敦 深澤晴美 勉誠出版 2016.8

日本人初のノーベル賞作家の、実は初の詳細な年譜。新発掘を含む数多の資料・取材を総合し、鎌倉時代の祖先から始め、誕生から死まで一年毎にその生活を日付け付きで再現。川端康成研究のみならず、日本近代史研究の重要な資料ともなるべき大著です。

『川端康成と書ー文人たちの墨跡ー』

水原園博 求龍堂 2019.2

自身も書を嗜んだ康成は、古今の書画の蒐集家でもありました。近年の私邸調査で発見された愛憎の書は、近代学史上のそうそうたる顔ぶれの手になるものばかり。これら新発見も交え、川端コレクションの書幅類を追っていく、文豪の書でたどる近代文学。



2022年6月-2022年7月号

特集1

川端康成 没後50年

特集2

パンダ 初来日から50年

連載

書名でしりとり

お知らせ

西東京市図書館からのお知らせ
FM西東京で紹介した本

パンダ、来日 から50年！



パンダが日本にはじめてやってきたのは、昭和47(1972)年。日中国交正常化の記念として贈られるという政治的な背景も背負ってやってきたこの動物は、大きな期待と関心、そして不安を持って上野動物園に迎えられました。それから50年。パンダとともに歩んだ歴史とその魅力がギュッとつまった本をご紹介します！

『パンダ日記 カンカンとランランの記憶』

(中川志郎／著 新潮社、1984.6)
やんちゃなカンカン、おしとやかなランラン。上野動物園にやってきた二頭のパンダの、当時の館長さんによる飼育日記。
ただし日記の大半は、どうやって二頭に「愛し合って」もらい、子どもを産んでもらうか、ということ。当時の関係者に寄せられていた期待とプレッシャーの大きさがうかがえます。
1984年刊行ということで、今の読者はどちらかというパンダ側の気持ちになって読んでしまうかも…最後の検死のシーンは複雑な気持ちになります。

『おお パンダ！！』

(小野満春／著 翠楊社、1972.12)
パンダが日本にやってきたその年に、上っ面のパンダブームに“水を差す”ために書かれた一冊。かわいいヌイグルミじゃない！という熱い気持ちが伝わります。

『パンダが来た道—人と歩んだ150年—』

(ヘンリー・ニコルズ／著 遠藤秀紀／監修 池村千秋／訳 白水社 2014.2)
アイドル的人気のパンダと人間の数奇な軌跡とは。その生態と繁殖から、保護活動の最新情報まで網羅。

『パンダ通』

(黒柳徹子、岩合光昭／著

朝日新聞社 2007.10)

『読むパンダ』

(黒柳徹子／選 日本ペンクラブ／編

白水社 2018.01)

「元祖パンダ博士」といえば黒柳徹子さん、なんだそうです(知りませんでした)。

前者は世界で初めて野生のパンダ撮影に成功した岩合さんと二人でパンダの魅力を語りつくし、後者は浅田次郎、ヒガアロハ、高畑勲などなど、各界のパンダファン&歴代の飼育担当者による、パンダ尽くしのエッセイ22篇。

『HELLO LITTLE—アドベンチャーワールドで生まれたあかちゃんパンダの奇跡—』

(小澤千一郎／著 徳間書店 2019.3)

日本でパンダと言えば、上野動物園？ いえいえ、和歌山・南紀白浜のアドベンチャーワールドなのです！中国以外では世界一の「17頭の子ども(2022.5時点)」という成果が、繁殖技術の高さを物語っています。

本書は2018年8月に生まれた「彩浜(さいひん)」の、生まれたときから元気になって歩き出した生後五か月までの貴重なショットを集めた写真集。生まれたときの体重は、なんと75gです。

『パンダより恋が苦手な私たち』

(瀬那和章／著 講談社 2021.6)

恋愛コラムを執筆することになった編集者の一葉が、動物の「恋愛」を専門とする変人准教授・椎堂司に助けを求めるラブコメディ。
さまざまな動物の生態がストーリーに絡んできますが、パンダは「(人間から勝手に恋が下手だと言われていたけど)実は恋愛上級者な動物」として登場します。パンダの赤ちゃんが生まれるたびに大きなニュースになるのはパンダの発情期が極端に短いから。その短い期間に恋愛させるのは難しいと言われていたけれど、実はある必要な仕掛けがあったのです。参考文献の『誰も知らない野生のパンダ』も合わせてどうぞ。

西東京市図書館からのお知らせ

制限付き開館のご案内

当面利用できるコーナーに制限があります。
また、ご来館にあたってはマスクの着用と、できるだけ短時間でのご利用をお願いしています。
詳しくはお電話または図書館ホームページでご確認ください。

F M西東京で紹介した本

『ウルトラ音楽術』

(冬木透／著 集英社 2022.4)

テレビでオンエアーされてから55年近く経った今もファンの心に残り続ける『ウルトラセブン』。その魅力のひとつに音楽のすばらしさがあります。オープニングのテーマ曲をはじめとするオリジナルの曲の格調の高さ、それに加えてところどころで効果的に使われたクラシック音楽。これらがそのドラマを一層重厚にし、音楽とともにシーンが記憶に刻まれました。本書ではこの『ウルトラセブン』の音楽の作曲者であり、音楽監督を務めた冬木透(フキトオル)氏が、自身の生涯と『ウルトラセブン』の音楽がいかに生まれたかを語ります。

『植物画で彩る美しい花言葉 —花図譜で楽しむ、小さな物語—』

(二宮孝嗣／著 ナツメ社 2022.2)

人気の切り花から身近な山野草まで、季節ごとに分けて、美しく緻密な植物画と共に花言葉が紹介されています。花の特徴や花言葉の由来となったエピソードの他、開花時期や花色といったデータも収録されています。たとえば、母の日に贈る代表の花カーネーションは、赤は「愛」「感動」、ピンクは「感謝の心」「温かな愛情」といったように、花の色によって花言葉が違ってきます。大好きな人やお世話になった人への気持ちを込めて、花言葉を添えて花束や贈り物をしてみてはいかがでしょうか。

発行：西東京市図書館

<http://www.library.city.nishitokyo.lg.jp>